

エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

第五回 戦火を逃れて

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

5-1 ベイルートに妻子到着 - ゴミ処理ショック

1975年1月に、私は正式に丸善石油の中東事務所長を命じられてベイルートに着任し、3月27日には、妻節子と中2の長女葉子、それに小3の次女智子が日本から到着した。

妻にとっては初めての外国への旅、長女もそう頼りになる年頃ではなかった。JALの家族サービスを頼んではいたが「無事に到着するかな」と私は、深夜の空港で不安だった。その夜空港に来てくれたベイルート駐在の先輩の三和銀行の讃井夫妻の存在がなによりも心強かった。案内板でJAL機の到着を知ってから待つこと約1時間、家族3人が送迎口から出てきたのを見て、私は安堵した。

私は当面の滞在先として、海岸べりのコーニッシュ通りに面した瀟洒なリヴィエラ・ホテルを数日間予約した。8階に日本食レストランが、ホテル右手すぐの「タラータ・アメリカーナ（アメリカ坂）」を数十メートル上がったところに移り住むマンションがあり、入居準備をするのに便利な場所にあった。

翌日午前11時ごろに寝ぼけ眼で起き出すと、妻から次女が熱を出していると聞いた。初めての外国への長旅、7歳の身体は心身のストレスに耐え切れなかったのであろう。

私はその日の午後、ベイルートにきていたクウェート石油省のアリ次官補とフェニシア・ホテルで会う手筈になっていた。仕事一筋で家庭を省みない、典型的な「猛烈サラリーマン」であった私は、東京から出張して同じホテルに泊まっていた旧知のニチメンの牧野に妻を紹介し、後事を託してフェニシア・ホテルに向かった。

常日頃私は、「あなたみたいな人は、家族を持つ資格なんかないのよ。仕事、仕事で、家族はどうでもいいんだから」と妻からなじられていた。初めての外国で、妻や娘たちにとって初対面の牧野に医者の手配まで任せて出かけるのは、さすがに後ろ髪引かれる思いであった。

幸いにも、レバノン人医師に診てもらった次女はすぐに回復し、数日間のホテル滞在後、私たち一家は無事にマンションに移り住んだ。7階建てで、広さが300平方メートルもある4LDKの豪華マンションで、高台のベランダから180度見渡す地中海の景観は素晴らしかった。

14戸収容のマンションに他の日本人家族はいなかったが、谷を隔てた丘に建つマンションには在レバノン日本大使館の野見山公使一家が、右下100メートルほどの海岸近くのマンションには三和銀行の黒瀬支店長一家が住んでいた。

入居した朝、「パパ、パパ、早く来て！」と叫びながら、長女と次女が大理石の廊下をパタパタと走ってきて、キャッチボールができるほどの広い居間で片付けをしていた妻と私のところにご注進。手を止めて、廊下の突き当り右手の夫婦のベッドルームに行ってみると、引越し荷物を運び込んできた毛むくじゃらの男が空になったダンボールの箱を窓からポンポンと外に投げ捨てている。

「何をするんだ！」と言いながら私が窓から顔を出してみると、マンションの裏手は広い空き地になっていて、あちらこちらにゴミの山ができています。男たちはそこに向かってダンボール箱をポンポンと放り出しているのだった。「雑！このような荒っぽい仕事をする運送会社は日本にはない」。

いきなりのカルチャーショックであった。

5-2 ベイルート内戦 - 銃声と爆発音の中で

「パーン」、「パーン」、「パーン」。

「大丈夫かな」と妻に言いながら、私は受話器をとった。「ハロー、リヴィエラ・ホテル？ 324号室の白石さんにつないで」、「少々、お待ち下さい」。

「白石さん？あなたが家を出てからすぐに銃砲の音がした、ホテルに無事に帰れたかなと思って。みなさん無事ですね。よかった。それじゃまた、お休みなさい」。

1975年10月のとある日、共同石油のスタッフがわが家に集まり夕方から夕食付きの麻雀となった。銃声が聞こえたのは、お開きになって一行が宿泊先のリヴィエラ・ホテルに引き上げた夜の11時過ぎ。彼らは戸建てで共同生活をしていましたが、ベイルート内戦の激化に伴い、リヴィエラ・ホテルに移り住んでいた。

それより前に、三和銀行グループの企業数社の所長夫妻がわが家に集まってベイルートからの避難の打ち合わせを終えて三和銀行の黒瀬所長夫妻がわが家を出た途端に「ドーン」と大きな爆発音がして、夫妻の家に安着を確かめる電話を入れた一件があったばかりであった。

「中東のバリ」といわれて平和と繁栄を謳歌していたベイルートが泥沼の内戦に引き込まれたのは、これより前、私たち一家がベイルート生活を始めてまだ半月も経たない4月13日のことであった。郊外のアイン・ルンマーネの教会近くを武装パレスチナ・ゲリラを乗せてナンバープレートを隠したまま通過しようとしたバスを、レバノン右派キリスト教徒の最有力政党であるフランジスト党武装グループが襲撃し、27名が死亡した事件がきっかけであった。

娘たちがベイルート郊外の日本人学校にスクールバスで通い始め、私たち家族がベイルートの生活に入ったばかりのことであった。

バス襲撃事件後2週間余りの間に両者の衝突は北のトリポリ、南のサイーダにも拡大し、死者の数も100名を超す事態となった。5月末にはベイルートの東部地区でもフランジスト派とパレスチナ・ゲリラが衝突、やがてフランジストを中心とするレバノン右派勢力とイスラム教徒を中心とするレバノン左派勢力の対立へと事態はエスカレートしていった。

街のあちこちで撃ち合いや爆弾騒ぎが拡がり、イスラム教徒の住むダウンタウンを歩いて行かねばならない日本人学校も、通学路の危険から休校の日が出るようになっていた。思いもしない事態であった。

私の家に魚を売りにきていたイエス・キリストに似た風貌のレバノン人青年のヨセフが顔を見せなくなった。庭に椅子を置いただけの近所のレバノン人の床屋に行った時に私が親父に「ヨセフはどうしている？」と訊ねたら、「撃たれて死んだ」と聞いた。帰宅してこの話をすると、「可哀そう」と娘たちが小さな胸を痛めたのもこの頃のことであった。

レバノンでなぜこんな争いが起こったのか。そこにはレバノン固有の国家構造があった。

レバノンは、多民族・多宗教のモザイク国家である。宗教的にはマロン派キリスト教、ギリシャ正教とギリシャ旧教、アルメニア正教などのキリスト教とスンナ派、シーア派、ドルーズ派などのイスラム教などの18宗派が存在すると言われている。民族も、アラブ人、クルド人、アルメニア人、ユダヤ人など。アラブ人が大多数を占めるが、アラブ人と言っても古代フェニキア人の末裔と称するレバノン人、パレスチナ人、シリア人など多岐に亘る。

レバノンは長い間トルコ帝国の支配下にあったが、第1次世界大戦後の1920年にフランスの委任統治下に入り、1943年に独立した。委任統治時代に人口構成に基づいてキリスト教徒6、イスラム教徒5という割合で代表を議会に送る、また大統領はマロン派キリスト教徒、首相はスンナ派イスラム教徒、国会議長はシーア派イスラム教徒、副首相と国会副議長はギリシャ正教、主要な閣僚ポストも特定の宗派で保持されるという慣行が成立した。この中で、マロン派キリスト教徒が政治や経済・社会面で圧倒的な優位を保ち、イスラム教徒は劣位にあった。

レバノンはこの宗派別構造の上に立って政治的安定を保ち、その繁栄を謳歌した。しかし、この宗派別主義は、国家・国民よりも宗派・部族に対する忠誠心を優先させ、他宗派に対する対立や非妥協を生む要素を常にはらんでいた。また、イスラム教徒の人口の伸びが大きく、委任時代の人口構成に基づいた議員数に対してイスラム教徒から改定への強い要求が出されるようになっていた。

そこに、外部要因が加わった。パレスチナ問題である。1948年のパレスチナ戦争で、レバノンには多数のパレスチナ難民が移住した。1967年の第3次中東戦争によってさらなるパレスチナ難民が加わり、パレスチナ人民解放戦線によるパレスチナ・ゲリラの活動が激化した。パレスチナ・ゲリラが南部レバノンからイスラエルに侵入したために、1968年暮れにはベイルート空港がイスラエル空挺団によって急襲された。

このパレスチナの活動に危機感を持ったのが、キリスト教レバノン人側であった。そこでレバノン国内で深刻な亀裂が起こった。キリスト教徒側はパレスチナ・ゲリラの活動はイスラエルによるレバノン攻撃の起因であるとしてこれに反対し、イスラム教徒側は「アラブの大義」としてこれを支援したのであった。

1969年には、パレスチナの支援の是非をめぐる、キリスト教徒側とイスラム教徒側の武力衝突が2度に亘って発生した。

1970年、ヨルダンに本部を置きイスラエルへの侵入を繰り返していたパレスチナ解放機構（PLO）がヨルダンから放逐されると、本部をレバノンに移し、南部レバノンの対イスラエル抗戦に参加するだけでなく、レバノン各地の難民キャンプに流れ込み、難民キャンプはパレスチナ・ゲリラの基地と化した。

このパレスチナの活動に一層危機感を持ったキリスト教側も、パレスチナ解放機構や国内のパレスチナ人支持派のイスラム教側も、競って兵力と武器の確保に走った。

レバノンでは、有力な部族は私兵を擁していた。内戦当時には、マロン派の政治組織のファランジスト民兵1万2千名を含む右派勢力は2万人、パレスチナ勢力もほぼ同数のコマンドを擁していたとみられる。ドルーズ派も武装民兵6千名を擁していた。これに対して、レバノン政府軍は1万8千名を擁していたが頼りない存在で、内戦に介入せず、内戦後半には兵の離反が相次ぎ、ついには解体してしまった。

1975年の7月に入ると紛争は沈静化に向かい、わが家も8月には夏のバカンスでギリシャに出かけ、3泊4日の地中海クルージングを満喫した。

しかしながら、ベイルートの平和は長くは続かなかった。9月初旬になって衝突がトリポリで再発した。マロン派キリスト教徒がイスラム教徒を乗せたバスを襲撃して12名を殺害したのをきっかけに両者が全面的な市街戦に突入し、死者300人、負傷者は1700人に達し、事態は一挙に本格的なレバノン内戦に発展した。

私たちが住むマンション近くのベイルート随一の繁華街ハムラ通りでも爆弾テロが頻発するようになり、日本人が多く住んでいた西北部のラオシェ地区、さらには空港に通じる道でも左右両派の撃ち合いが始まり、空港もしばしば閉鎖されるようになった。

4月の最初の衝突以来、治安状態の悪化を懸念した日本人家庭では家族全員の航空券を購入し相当の現金も家に置くようになっていたが、9月に入ってベイルートからの避難を考える日本企業も出始めていた。

しかし、先行きが不透明のため先の見通しがなかなか立てられない。さんざん迷った挙句に、私は家族を連れて新日本汽船の伴野、輸出入銀行の小林両所長一家とともにロンドンに一時避難をして様子を見ることにし、9月25日にロンドンに向けてベイルートを飛び立った。

ロンドンに避難している間にも、ベイルートの情勢は一向に好転しなかった。そのまま日本に引き上げるという選択もあったが、荷物をベイルートに置いたままであり、3家族で一旦ベイルートに戻ろうということになった。

内戦でオープンと閉鎖を繰り返していたベイルート空港がオープンしていることを確かめてMEA（Middle East Airlines）機でヒースロー空港からベイルート空港に着いたのは、10月8日午後4時を廻った頃であった。

日もやや傾き始めた中で久しぶりに見るベイルート空港に駐機していた飛行機はわずか2、3機であった。かつての賑わいとは様変わりの閑散とした光景。機内アナウンスで「空港は只今閉鎖中です。到着後、急いで降りて下さい」と告げている。「ヒースローを発つ時にはオープンしていると言っていたのに」とぼやいても後の祭りであった。

「家まで無事にたどり着けるだろうか」と不安が募る。入国手続きを済ませ、挨拶も早々に、3家族はそれぞれ会社の車やタクシーに乗り込んで家路についた。

あの時の緊張感はいまでも私の記憶にはっきりと残っている。タクシーに乗り込んだわが家の一行は後部座席に固まって乗り、子供たちは座席の下にうずくまらせ、私と妻は頭が後ろの窓から見えないように座席で身体を横たえた。

ベイルートで撃ち合いをしているのは民兵、中には子供もいた。正規の軍人ではなく、戦時訓練などを受けていない。彼ら自身も怖いので「動くものは何でも撃つ」という有様だったので、いつどこから鉄砲玉が飛んでくるか分からない。頭を出している訳にはいかなかったのであった。

空港から家まで30分以上。走る車から見上げる高層ビルには厚い雲が垂れ込め、薄暗くなりかけの空は不気味だった。ビルの屋上から狙撃してくる民兵はいないかと身体を横たえ、上ばかりを眺め続けた緊張しつ放しのドライブであった。

私たちのロンドン避難中の9月30日には、フランジスト派によるドルーズ派イスラム教徒の虐殺事件が発生し、それまで戦争に巻き込まれていなかった穏健なドルーズ派も戦争に加わった。ここで、キリスト教・右派とイスラム教・左派の全面対決が明確となった。わが家のあるタラータ・アメリカナ周辺はドルーズ派の人たちの居住区でベイルートで最も安全な地域と言われていたが、この参戦によって近所でも銃声や爆発音がよく聞かれるようになっていた。

こんな戦火の真っ只中のベイルートで共同石油のスタッフを招いて妻の料理でもてなし、麻雀を楽しんだ一夜であったが、「白石さんたち、無事で良かった」、「パパ、麻雀に来ていただくにしても、明るい内に帰れるようにしないと危ないわね」という妻の言葉に相槌を打ちながら、私たちはその夜眠りについた。

5-3 ベイルート駐在員の悲哀 - 「ハナチューチュー」・エレジー

ベイルートから邦人の避難が始まってから、家族を先に日本に帰して単身でベイルートに残った人や元々独身の人などが、まだ家族ぐるみ残っている家庭に集まることが多くなり、わが家にも、商社・金融・メーカーなどの駐在員たちが四六時中食事に訪れた。

伊藤忠商事の藤野所長と宮本、三菱銀行の佐々木、共同石油の白石所長などの常連の中に、鐘紡の高橋もいた。

当時、私は「ベイルート駐在員は『ハナチューチュー』よ」と宣伝していた。第一次石油危機後にこぞってベイルートに進出した日本の企業はエリート社員を投入し、すでに進出していた商社なども優秀な人材をニューヨークやロンドンからベイルートにシフトさせていた。つまり、中東駐在員は当時の花形社員。私は、当時人気であった園山俊二の人気マンガ「花の係長」をもじって「花の中東駐在員」、これを略して「ハナチューチュー」と呼んでいた。

鐘紡の高橋も「ハナチューチュー」の一人。慶応大学卒のハンサムな独身青年であり、学歴、容姿、会社のどれをとっても申し分がなかった。ある日、高橋が私の家にやって来て「ロンド

ンに避難しますが、秘書と連絡がつかず会社の金庫が開けられません。金を融通して貰えませんか」と言うので、個人的に1000ドル貸したことがあった。

後日高橋が事務所引揚げのためにロンドンからベイルートに入ってきて、金を返しに私の家に立ち寄った時に「ハナチューチュー・エレジー」を聞き、私は意気消沈した。

高橋は結婚適齢期。日本でご両親が気を揉んで結婚相手を探したが、高橋がベイルート駐在員であった時には、見合い写真の1枚も届かなかったそうだ。それが、避難してロンドン駐在員になった途端に見合い写真が届くどころか、ある奥様は娘さん、つまり実物を連れてわざわざロンドンまでに押しかけてきたという。様変わりであった。

本人の中身は何も変わっていない。変わったのは、ベイルート駐在員からロンドン駐在員への肩書だけ。花の係長ならぬ「ハナチューチュー」は、石油危機直後でもこんな体たらく、所詮はうら悲しい企業戦士であった。

5-4 ベイルート脱出 - 混雑きわまる空港

10月になって戦火がベイルートの中心街にまで及んで来て、ベイルート脱出を決める企業が続出していた。

私たちは初めて外国に住んで、個人ではなく「丸善石油の遠藤さん」というように、個人より会社が優先的に認識されるのを感じていたが、邦人脱出という状況になって、企業グループ単位の行動がますます顕在化していた。

日本人会会長や理事のポストは旧財閥系グループの持ちまわり。日本大使館はこれら日本企業のトップたちと情報交換を行い、対応策を相談し合っていた。丸善石油のような非財閥系の会社にはその機会がなかった。

幸いなことに、私には財閥系の会社に商売上や個人的な友人がいたので、インフォーマルに情報は流れてきた。

「もしもし、三菱石油の釘沢です」と電話。「うちのグループは明日ベイルートを脱出してアテネに一時避難します。三菱グループの避難が知れると日本人社会が動揺するので、外部へは口止めされていますが、お知らせしておきます」。

翌日は「もしもし、遠藤さんですか」と住友商事の杉山からの同じ内容の電話。

日本人会だと思っていたのは、実は三菱人や住友友人のモザイクだった。財閥系大企業は、事前に大使館筋から情報が入り、十分な対応がとれたのだった。

その後に初めて大使館との会合に出席した私は大使館スタッフに、「三菱や三井、住友グループの人びとは一丁上がりで成仏出来たが、ベイルートにはまだ成仏出来ないで彷徨っている小さな会社の日本人が残っている。われわれだって同じ日本人。大使館は迷える人たちをすべて救う菩薩の気持を持って働いて欲しい。あちこちに穴が開き情報も流れなくなっている日本人会の情報網を整備して情報を十分に流して欲しい」と要望したことがあった。

日本は非常時になると、国としても頼りなかった。

アメリカの場合には、自国民を退去させるべく、沖に第六艦隊の船を待機させているとも聞いた。それに、その後のイラン・イラク戦争、湾岸戦争、マニラの民主革命時の民間人の扱いでも、外務省の対応は万全とは言えなかった。マニラでは、「非常時に民間の人を大使館の車に乗せなかった」ということも仄聞した。官民差別のある外務省の対応は基本的にはいまも変わっていないように私には思える。

有力企業グループの多くがベイルートを脱出した後、私の家でも治安の悪さから日中の外出すらままならなくなり、日本人学校も休校で子供たちも家に居ざるを得ない状態が続き、ベイルート脱出を具体的に考えざるを得ない状況にあった。

私がLPGのDD契約の件でクウェートに出張することになり、万が一の時の家族のケアを新日本汽船の伴野所長に託してクウェートに向かったのは10月20日のことであった。

例によって、私は空港までの道をゲリラたちの狙撃を警戒しながら、閑散としたベイルート空港に着き、なんとかクウェート行きのMEA機に乗り込んだ。

私はクウェートでは現地の英字新聞でベイルート情勢を注意深くフォローしていたが、3日目の朝に新聞の一面トップの車が炎上している大写しの写真が私の目に飛び込んできた。ベイルート内戦を伝える写真で、見出しに大きく「爆弾テロ、砲撃戦が全市に広がる」とあった。

私には家族の安否への不安が一気にこみ上げてきた。「妻や子供たちは大丈夫かな」、「ベイルート行きの飛行機が飛ぶのか。ベイルートに戻れないかも」と、胸の潰れる思いであった。

ベイルートのわが家に電話をしてもつながらない。いっそう不安が募る。「仕事どころではない。家族は早く日本に帰そう。こんな心配はもうたくさんだ」と日本への帰国を心に決めたのであった。そして、石油省との用件を早々に片付け、戦火が拡大するベイルートに戻った。

それまで会社からも親たちからも「大丈夫か」、「心配!」という内容のテレックスや電話が来ていた。その都度、「日本の報道はオーバー」、「メディアはベイルートのハマラ通りに爆弾騒ぎがあると、その写真を大きく報道する。ベイルートだって広い。われわれの住んでいるタラタ・アメリカナ周辺はベイルートでもっとも安全な地域。心配ご無用」と言ってきた。

しかし、クウェートでベイルートの新聞を見たときには全身が震えた。会社の人たち、親たちが心配したのはこれだったのかと、身に沁みて思い知らされた。

大使館から在留邦人に避難命令が出されたのは、それからまもなくのことであった。私も迷わずに本社の了解をとって、在留邦人の第一陣としてJAL便で家族を日本に帰すことにした。

その時の私に対する会社の指令は、「家族の帰国は認める。貴君の日本への帰国はまかりならない。ヨーロッパに行くことも認めない。中東地域に残るように。子会社のアブダビ石油のキャンプに入るように」というものであった。私はこれに従って家族がベイルートを離れる日にアブダビに向かうこととした。

1975年10月29日午後6時過ぎのベイルート空港。私はMEA機の窓から、夕闇迫る隣の滑走路でゆっくりとエンジンを回しているJAL機を眺めていた。どうやら私が乗ったアブダビ行きのMEA機の方が先に飛び立つようで、いち早くエンジンを全開にして離陸体制に入った。飛び立つと、JALの巨大なジャンボ機が眼下に見えたと思ったら、どんどんと視界

から遠ざかっていった。

「あの飛行機には、60人の日本人社員とその家族が乗り込んでいる。一緒にロンドンに一時避難した新日本汽船の伴野や輸出入銀行の小林の家族、それに妻や子供たちも乗っている」、「私だけが家族と別。一緒に日本に帰りたいな。淋しい」と思っても会社の指令なのだから仕方がない。かくして、家族の無事な日本到着を祈りながら、私はアブダビに向かった。

思えば、ここまでたどり着くのは大変であった。まずは荷物の整理。JALが特別に認めてくれた荷物の重量は1人100キロ。私の家では、人影もまばらなベイルートの街角で20キロ詰めの旅行カバンを7個購入し、各自の旅行カバンを加えた10個の旅行カバンに身の回りのものだけを詰めて日本に持ち帰させることにした。

あとの家財は、私が折りを見てアブダビからベイルートに入り、会社のものはアブダビに私物は日本に送り返すことにして、すべて荷造りをして例の広い居間に積み上げて残した。

3年間はベイルートに住むだろうと日本から大量に持ち込んでいた味噌、醤油、缶詰類などの食料品は、残留する大使館や報道関係の人たちのために使ってもらおう、すべて日本料理店「東京レストラン」に寄付した。私物の絨毯類は娘たちの英語の家庭教師のアメリカ人女性に、余ったLPGボンベやこまごまとしたものはシリア人のメイドにあげてしまって、きれいさっぱり。

当日の空港への移動もたいへんであった。飛行機の出発時間は午後6時過ぎであったが、空港への道の治安を考えて午後1時過ぎには家を出ることにしていた。それが、前日に頼んでおいたハイヤーが時間になっても来ない。私は「途中で戦闘にでも巻き込まれてしまったのかなあ」と心配した。ベランダからおそるおそる覗いてみる通りには人影もまばらで、底知れぬ不安がこみ上げていた。

「リーン、リーン」と電話のベルの音。「もしもし、こちら、ベイルートタクシー、まもなく参ります」、「分かった。じゃあ後で」。

まもなくやってきたハイヤーに荷物を積み込み、送りに来てくれたアメリカ人女性英語教師とシリア人メイドとその息子に別れを告げ、坂を下った所の新日本汽船の伴野宅に立ち寄り、2台の車を連ねてベイルート空港に無事に着いたのは、午後2時過ぎであった。

空港でのチェックインも一苦勞であった。当日のベイルート空港は各国の避難民でごった返していた。ほとんどが家族連れで、荷物も持てるだけ持ってきているので、すごい混雑ぶりで足の踏み場もなかった。JALのチェックイン・カウンターにも日本人の長い列ができていた。

旅行カバンだけならまだしも、勉強机や自転車まで持ち込んでいる人がいて、いつになったらチェックインができるか分からない混雑ぶりであった。それでもなんとか家族の日本行きのチェックイン手続きを済ませてから、私は自身のアブダビ行きの手続きを終えて、家族が空港ロビーからゲートに入るのを無事に見送ることができた。

私が乗ったアブダビ行きのME A機はやがて安定飛行に入り、順調な飛行を続けている。1人機内でその軽やかなエンジン音を聞きながら、私は別れ際の杉浦徳駐レバノン日本大使の言葉を思い出していた。

まだ空港行のバイルートタクシーが自宅に到着する前に、私は大使に挨拶をすべく電話を入れたときのことである。「大使、お世話になりました。これからバイルートを出ます。お元気で」と告げると、「遠藤君、君はどこに逃げるつもりなのか。君は中東のことを理解していない」とお叱りの言葉。「このバイルートの紛争は他地域にも広がって行く。どこへ逃げたって同じだよ」と言われた。

その後のイラクのクウェート侵攻、イスラエル・パレスチナの和平問題、イラク戦争、アラブの春、その後のリビア、イラク、シリア、イエメンなどでの内戦などを見ると卓見にも思えるが、大使はどのように見ておられたのか。

常日頃、大使には、「遠藤君、中東のことを知りたければ、ヨルダンに行け」とも言われていた。中東の根っこの問題はパレスチナ問題、ヨルダンはそれを映す鏡のような場所という意味合いだったのだろうか。

5-5 サウジアラビアにて - たったの5億円

私がアブダビ石油のキャンプに避難している間、合羽からげての中東三度笠よろしく、カバン1つでサウジアラビアやクウェート、イランなどの産油国への旅と事務所の後始末をするためのバイルートへの旅が続いた。

それは、1976年2月にサウジアラビアのペトロミンを訪ねた時のことであった。広いアリレザ部長の部屋に入った私に、「あなたの国では、田中元首相がロッキード社から受け取った賄賂で大騒ぎをしている。額は、たったの5億円。5億円なんてピーナツだ。なんであんなに大騒ぎをするのか」といきなりのパンチ。

こちらは予期せぬ質問に一瞬詰まったが、「金の額ではない。賄賂をとったからには、逮捕は当然」と切り返した。

石油で喰るほどの金をもっていたサウジアラビア、個人的にもサウジアラビアの大財閥出身の同部長にとって、5億円なんかはわれわれの5万円ぐらいの感覚だったのであろうか。部長の質問は、日本との金持ち度の差だったのだろうか。あるいは、バクシーシー（賄賂）が常識である中東と日本との価値観の差であったろうか。いずれにしても、細かいことで何をがたがた騒いでいるのかとのコメントであった。

アリレザ部長が駐米大使に転出した後任は、アメリカの大学を卒業した色白のエルフレイジャー石油部長。世界中が油乞いに走った当時、産油国側は「石油は慈悲深く慈愛あまねきアッラーからの授かり物、これをお前たちにも恵んでやる」という態度。

私が彼との商談のためにリヤドを訪れ、予約をしておいたホテルに着いたが、例によって部屋が満杯だという。バイルートで貰った予約クーポンを見せたが、ホテル側は「ないものはない！」の一点張り。仕方なしに他のホテルを転々と廻り、夜の8時過ぎに、なんとかその夜のベッドを確保できた。「よし、石油を恵んでやっているという態度のサウジアラビア側にこのことを言ってやろう」と翌日同部長に会うや否や、私はまくしたてた。

「石油購入交渉でニューヨークに行くと、メジャーは空港まで迎えに来てくれる、ホテルも予約し、食事にだって招待してくれる。それが、サウジアラビアの場合はどうだ。何もしてくれない。昨晚私がベッドを確保するのに、どんなに苦勞したか知っている？こんなことならメジャーから原油を買う方がましだ」と。その時にはニューヨークへは行ったことはなかった私は、精一杯の背伸びをした。

どう返事をするかなと固唾を呑んでいると、部長は、「ペトロミンは、観光会社ではない」とピシヤリ。あの時代に、産油国に対してこんなおそれ多い要求をする者はいなかった。不意をつかれてとっさに出た答えだったろうが、「簡にして要を得ている」と変に感心したのを覚えていて。

その日ホテルで会った三井物産の伊藤が、「遠藤さん、今日ペトロミンが珍しいことを言いましたよ。私が部屋に入ったらエルフレイジーが『ホテルはどうした』と訊ねたんですよ。いままでこんなことなかったのに」と話かけてきた。「ハハーン、俺にはペトロミンは観光会社ではないと突っぱねたが、俺のパンチが少しは効いていたんだなあ。日本人も平身低頭するだけでなく、少しは産油国に言い返してよ」とひそかに私は思った。

5-6 ベイルート撤退準備 - さながら戦災孤児

12月上旬にベイルート情勢がやや落ち着いたのを見計らって、荷物発送のためにベイルートに入った。

10月末のJALの第一次救援機で奥様と日本に引き揚げて行った三菱石油の釘沢ベイルート所長が原油購入直接交渉のためにたまたまアブダビに来ていて、私のベイルート入りを聞きつけて、同行を申し込んできた。私も連れがある方が心強いので、MEA機で2人でベイルートへ。空港からは狙撃されない幸運を頼りに、なんとか無事にそれぞれの家にたどり着いた。釘沢は、リビア国営石油で「石油を売ってくれなければ、ここで切腹させてもらう」と言っただかの猛者。

ベイルートには、当時まだ大使館、報道関係者、一部の商社員、個人資格の邦人などが残留していた。それに近隣諸国に一旦避難した各社のベイルート駐在員も荷物まとめや行き場がないため、何人かがベイルートに戻ってきていた。

関係商社に顔を出すと、仕事もないからすぐに麻雀のメンバーが揃った。「今日はわが家でやろうよ。来てくれる？」、「OK」ということで日商岩井の矢沢の家に出かけた。

その時の私のいでたちは、半袖のシャツに半ズボン、ドタ靴を履いて、丸めた毛布を小脇に抱え、洗面用具を入れたカバンを肩からはすかいに下げたスタイル。夜、麻雀が終わっても自宅に帰るわけにはいかない。夜中に街を歩いていたら、民兵に撃たれて殺されるのがオチであった。

従って、麻雀も泊りがけとなる。ベッドはあるが、家族を日本に帰しているので寝具は矢沢の分しかない。従って、毛布から洗面用具一式を持参するためこのいでたちとなる。終戦後に

上野公園あたりにたむろした戦災孤児そっくりの姿であった。平和日本にあつて戦争に遭遇し、さらに戦災孤児姿になるとは思いもよらなかった。

矢沢は、当時松葉杖をついて戦乱のベイルートをうろついていた。リヤドに出張した際に知り合いの家で夕食をご馳走になり、夜中に宿舎に帰ったところ、門が閉まっていた入れない。塀をよじ登り、そこから下に飛び降りて足を挫いてしまったのだという。

矢沢が私の家に麻雀に来た時には、「ピンポーン」の呼び鈴で戸口に出たら、首からずだぶくろを下げ、毛布を背中にかついで、松葉杖姿で立っていた。その姿は終戦後の日本でよく見かけた傷病軍人そっくりであった。

矢沢はなかなかの猛者。よせばよいのに、ある時食事のために松葉杖姿で夜のベイルートの街に出たという。突然一条のサーチライトに目を射られ、やがて幾条ものサーチライトに全身照らし出され、気がついた時には何丁もの銃口に取り囲まれたそう。

「ホールド・アップ！」という声で、松葉杖から不自由に両手を上げると、兵士がばらばらと寄ってきてポケット等を調べられ釈放されたが、「サーチライトに照らされた銃口を見た時には生きた心地がしませんでしたよ」と高笑いしながら話してくれた。私は、兵士たちの方が矢沢の異様な傷病軍人姿には驚いただろうと思った。

石油公団の黒沢は、家族を日本へ帰してロンドンを拠点に中東をカバーしていたが、昼時にロンドンからベイルートに入り、市の中心部のラオシェにある自宅近くまで来たら、突然「ドン」という爆発音。爆風で飛ばされたのかは分からないが、気がついた時には数メートル先の舗道に伏せていたという。「あと何メートルか私が家に近づいていたら生命はなかったでしょう」と物静かな石油技術者の彼が語ってくれたのもこの頃のことであった。

当時の各社のベイルート駐在員は、会社の垣根を越えて「中東の戦友」と呼ぶにふさわしい間柄であった。ベイルート駐在員にとって、そこは東京との連絡場所であり生活拠点であったに過ぎず、仕事の主戦場はクウェート、サウジアラビアなどの湾岸諸国やイラクやシリアであった。

従って、内戦前もあちこちの国で鉢合わせすることが多かったが、ベイルートを引き払い家族を日本に帰した後で砂漠の国のホテルで思いかけずにこれらの戦友と会うのは、また格別に懐かしいものであった。

私がニチメンの打樋とクウェートのフェニシア・ホテルのロビーでバッタリと会ったのも、この頃のこと。大きな海亀の剥製を手にとら下げている。中東でこのようなものを持っている者を見たことがない。「どうしたの？」と訊ねると、「私は家族共々ベイルートからアテネに避難した。家財道具をとるためにベイルートに戻るつもりでしたが、戦火が激しくなりそれが叶わず、家族をそのまま日本に帰し、私だけがアテネに残った。この亀は前に私が家族とインドネシアに駐在していた時に買った値打ちもの、ワイフがこれだけは持ち出してと言ってきたので、危険を冒してベイルートに入って持ち出してきたのです」という。こんな打樋の姿も忘れえぬものであった。

さて、私と一緒にベイルートに入った釘沢は、今回は最後のベイルート入りになるというの

で、最後の荷物の持ち出しを行ったが、これは、いわば「ベイルートの釘沢家の葬式」であった。

その日は、私は三菱商事の河村家の葬式にも立ち会った。

ベイルートのホテルでばったり逢った当時アテネに避難していた河村が「自分の家に行くのは今日が最後」というので、私と釘沢も同行することにした。河村の家に入る。誰もいない。壁や部屋の装飾品も一切なし。ガラんとした家は物寂しかった。「得意のチャーハンを作りますから、食べて行って下さい。この家の供養のためです」と言って、河村は台所に立ってチャーハンを作り始めた。

当日のベイルートには不気味な分厚い雲がたれ込め、時折鉄砲や機関銃の音がしていたが、街は静まり返っていた。異様な雰囲気であった。私と釘沢は、フォークやプレート、ワイングラスの準備などテーブルメイキングを受け持った。やがてチャーハンが出来上がり、われわれはテーブルにつき、まずはワインで乾杯。次に、河村手作りのチャーハンを頂いた。「旨い！」。「今日でこの家も最後か」と感慨深そうな河村。戦乱のベイルートでの男3人だけの河村家の葬式であった。

5-7 戦乱のベイルートでの一夜 - 心に刺さる「くちなしの花」

1976年1月末にも、ベイルートに残した会社と私物の発送の可能性を探るために、私は避難先のアブダビからベイルートに入った。

空港に着いたのは午後4時過ぎ。数少ないタクシーの中から1台を拾い、人影がまばらで静まりかえった街を不安にさいなまれながら、私は家路を急いだ。内戦が一時的な小康状態の中、無事にたどり着いたマンションには人の気配がなかった。エレベーターで2階に上がり、自宅の鍵を開けて入る。広い居間に荷造りをしてうず高く積んであった荷物に異常はなかった。略奪にも会わず、ラッキーなことであった。

「空港はオープンしていたが、港があるベイルート東部はパレスチナ・ゲリラの支配下であり、治安の悪いところ。港はどうか」と思いながら、私はさっそくジョージに電話を入れた。

「ジョージ？ 遠藤です。いまアブダビから戻った。荷物を日本に送りたいのだが、港は開いている？」「遠藤さん、港は閉鎖されたままです。」「そうなの、どうしたらいい？」「いま5時ですが、6時頃には自宅に帰ります。途中貴男の家に寄ります」、「分かった。それじゃ、あとで」。

やがて戻ってきたジョージに訊ねると、「港が完全に閉鎖されたわけではない。オープンとクローズの状態を繰り返している。このところ、閉鎖された状態が続いている」とのことだった。

「ジョージ、私の部屋の鍵を預けておくから、港がオープンした時に私の荷物を日本に送り返してくれる？」と私が言うと、「いいですよ。荷物はまずヨーロッパに送られ、そこで別の船に積み替えられて日本に送られるから少々時間はかかりますよ」との答えが返ってきた。

ジョージは、同じマンションの4階に住んでいたレバノン人。氏素性は分からない。私がまだ家族と一緒に住んでいた頃、きれいな女性と連れ立ったジョージとは会釈を交わす程度の仲だった。12月に私がアブダビからベイルートに入った時に、運送会社の社長と聞いていたジョージに荷物のことで相談して話すようになった仲だった。

ベイルート引揚げ時に、荷物をタタキ売りで処分できた人はまだしも、処分出来ずにそのまま残して帰国してしまった日本人も大勢いた。その空き家にパレスチナ難民たちが上がりこんで、そのまま生活しているというような戦時下のベイルートで、氏素性も知らないジョージを信じて家の鍵を渡すなど無謀とも思えた。しかし、私は彼を全面的に信じることにした。いや、信じる以外になかったというのが本当かもしれなかった。

「ありがとう、ジョージ」と握手を求めると、「やってみましょう」と引き受けてくれた。日本人とレバノン人の男同士の約束であった。気持ちを込めた握手であった。

「ところで、遠藤さん。明日の夜8時にわが家に来られますか？ カナダに移住する従兄弟の送別会をやります。それに遠藤さんの送別会も」と言うのだ。戦火を逃れ国を捨てて移住する人のため、それに私の送別会も兼ねると言う。出席させてもらうことにした。

その夜、4階のジョージの家に行くと先客がいた。ジョージの友人でパレスチナ・ゲリラの将校だった。「みんな来る前に一杯飲もうか」と彼が立ち上がり、腰からピカピカのピストル二丁をはずし、テーブルの上においた。平和な日本ではみることもない物騒な代物。精一杯鷹揚に構えて「ちょっと見せてくれ」と断ってピストルを持ってみた。銃身がステンレス製で冷たい色を放ち、ずっしりとした重さが印象的であった。

ピストルを前にして酒を飲むのは気持の良いものではなかったが、話はけっこう弾んだ。ベイルート情勢、戦争の行方、荷物発送のこと、空港から街までの道が危険で怖いなどなど。「遠藤さん、心配ご無用。私がベイルート空港からの送り迎えをやりますから。アブダビからベイルートに入る時には、いつにてもご一報下さい」と件の将校がいう。気に入ってくれたのかもしれないが、機嫌を損ねれば一発ブツ放されてあの世行きかもしれない。不気味だった。

そのうちに、三々五々と人々が集まってきた。カナダへ移住するジョージの従兄弟夫婦、叔父夫妻やそのお嬢さん、友人、例のガールフレンドなども入れて総勢数十人が集まり、グラスを片手にした人々の話し声や笑い声が居間に広がった。

やがて、隣の部屋にしつらえたテーブルに着席しての食事となった。私の隣には品の良い初老のご夫婦と20歳前後の娘さんが座った。日本人の私にとりわけ興味を示し、日本のこと、家族のことなどで大いに話が弾んだ。

戦火の中での宴では、2列に並べられた長いテーブルのあちらこちらで話の渦が出来ていた。移住する従兄弟夫婦の挨拶やプレゼントの贈呈が終わり、脇のスペースで歌を唄い踊り出す者も出てパーティーがたけなわになった頃に、ジョージから私に「一言、挨拶を」と声がかかった。すでに拍手も沸き起こっている。やむなく私は立ち上がった。

「私は遠藤晴男といいます。日本人です。私はパレスチナ難民ではありませんがレバノン難民になってしまったので、半分日本人、半分レバノン人です」、「私は昨年10月に家族を日本

に帰してから、いまはアブダビにいます。今夜は日本の歌を唄わせていただきます。「くちなしの花」という歌です」とあいさつをした。

それから、私は日本に帰した妻のことを思いながら、一生懸命に歌った。

「ちいさな指輪もまわるほど
やせてやつれたお前のうわさ
くちなしの花の花を見るたび
いまでも心をしめつける
くちなしの白い花
お前のような花だった」

(作詞：水木かおる 作曲：遠藤実 歌：渡哲也 1973年)

私は歌いながら、この歌が私自身の心に突き刺さるのを感じていた。その年の1月にクウェートに出張した時に、ベイルートからクウェートに事務所を移した同業の出光興産の小野地支店長以下が私を寮での夕食に招いてくれた。中東の戦友たちとの薄暗い照明の下での宴で初めて聞いたこの歌は、家族を帰して砂漠の国々をさまよう私の心の琴線に触れるものがあつた。

パーティーの場もシーンと静まり返って行く。歌は一番から二番へ。

歌い終わると、盛んな拍手が沸き起こった。隣の老婦人は私の手を固く握って、「よい歌だった」と褒めてくれた。まったく日本語が分からない異国の人々に、言葉は通じなくとも感情は通じていた。言葉は、日本語、英語、アラビア語でも何でもよかつたのだ。

戦乱のベイルートでの一夜、一人淋しい日本人、ジョージとガールフレンド、これから国を捨てる人とこれを送るレバノンの人々、パレスチナ人将校、明日をも知れぬ人々の、国籍を越えた宴での出来事であつた。日本の歌がそのまま異国の人々にも通じた感動に、私自身もいつまでも浸っていた。

翌日、私は本社経由で頼まれていた炎上したフエニシア・ホテルのアネックスにあつた三和銀行のオフィス跡を訪ねることとした。同行を頼める人はいない。私は単身ベイルートタクシーを拾い、現場にはドライバーを同行させた。

アネックスの建物はなんとか原形を留めていたが、外面は焼けただけ、内部は真っ黒焦げであつた。三和銀行のオフィスがあつたのはこのビルの29階。エレベーターなどはない。黒焦げの瓦礫で埋まる階段らしき所を、足で瓦礫を払いながら、私はドライバーと1階から登った。

電気もないので、途中真っ暗闇な所もあつた。足元に細心の注意を払いながら、なんとか29階に到達してオフィスの中に入った。そこには何もなかつた。窓という窓は焼け落ちて、がらんどうで外が丸見え。中は黒焦げの瓦礫の山。原形を留めるものは何1つなかつた。わずかに、金庫だけが「もしかすると、これが金庫だつたかもしれない」と認識できた。

ホテルが炎上したのは、前年の1975年の11月29日。すさまじい砲火と火災だつたに違いない。がらんどうの窓の外には、地中海が眼前いっぱい広がっていたが、そこにはあの

燦燦たる太陽の下にきらめく平和な地中海の姿はもはやなかった。人っ子ひとりいないビルから顔でも出したら、どこからか弾丸が飛んでくるか分かったものではない。身震いをしている私の眼には、かつての青い地中海も鉛色の不気味な海に映っていた。

2、3日ベイルートに滞在した後、ジョージに「船積み出来る時に日本に荷物を送るよう」念押しをして、私は次の目的地のクウェートへと旅立った。

5-8 最後のレバノン行 - ベイルート事務所の終焉

1976年3月にベイルート事務所を最終的に閉鎖するために、私はまたアブダビからベイルートに入った。

ベイルートの戦闘は激化の一途を辿っており、「中東の戦友の中でも親しかった伊藤忠の宮本が避難先のアテネからベイルートに戻ったところ、空港閉鎖で街に入れずに、車でシリアに脱出した」ということも風の便りで聞いていた。

当時のベイルートには、大使館と報道関係や現地人と結婚した邦人が僅かに残る程度で、あちらこちらに散らばったベイルート駐在員たちでベイルートに入る人の数もめっきりと減っていた。

「ベイルートには入るのはもう無理かも」と覚悟し始めていたその年の2月に、本社から「中東事務所をベイルートからアブダビに移すよう」にとの指令を受けた私は、どうしてもベイルートに入らざるをえなかった。

当初、本社は「バーレーンに事務所を移すこと」を打診してきたが、私は「日本の金融機関はこぞってバーレーンに移っているようだが、交通の便と潜在力から、これから湾岸地域ではドバイが中心になる。中東事務所はドバイに移すのがベストだ。しかし、当社は石油会社。石油会社の場合には、ドバイという訳にはいかない。アブダビ以外にはない」と主張した。本社もこれを受け入れ、結局アブダビへの移転が決まったのであった。

ベイルート内戦で事務所を移転することになった時の各社の対応は大きく割れた。6大商社だけをみても、移転先はアテネが1社、イスタンブールが2社、カイロが1社、クウェートが2社であった。この異なる選択は、ベイルートが他より抜きん出ている、セカンドベストの地がないということを反映していたのだろう。

その後、ベイルートからクウェートに事務所を移した出光興産も、ベイルートからロンドンへさらにその後バーレーンに事務所を移した石油公団もアブダビに移転したこと、それに、コスモ石油などが現在アブダビに事務所を開設しているのを見ると、私の選択は正しかったと一人で悦に入っている。

移転先を決定したことで、次は会社の什器・備品などをベイルートからアブダビに運び出さねばならなかった。個人の荷物の方はジョージが無事にベイルート港から積み出してくれたことは先日テレックスで連絡を受けたが、今度は会社資産の番である。

いつ撃たれるか分からない中を空港から自宅にたどり着いたが、今回は家に泊まれるような

治安状態ではないので、リヴィエラ・ホテルに宿泊することにした。私の家のあったタラータ・アメリカナ周辺もイスラム教ドルーズ派の参戦によって、安全な場所とは言えなくなっていた。家に泊まっていて夜中に兵士にでも押し込まれたら、生命だって危険だ。

私はジョージに私物の日本への発送のお礼を述べるとともに、会社の什器・備品のアブダビへの転送について相談すべく電話をした。「遠藤さん、アブダビに荷物を送るには方法が2つあります」、「バイルートからシリアに出てイラク・クウェート経由でアブダビまでトラックで陸送する方法とバイルート空港がオープンしている時を見計らって空輸でアブダビに運ぶ2つです」と言う。

前者は木枠できちんと荷造りをするので荷造費用は高いが、運賃は安い。約3千キロのトラックでの大輸送。助手席に乗って突っ走るのも、刺激的で悪くはない。空輸は荷造りが簡単で安上がりだが、運賃は高い。しかも、空港が開いている時にしか運び出せない。

確実なのは前者だが、「シリアに着く前にバイルートとダマスカス間の山中で山賊に襲われるかもしれない」とのジョージの話。助手席に乗って旅を楽しむどころではない。途中で山賊に遭って殺されてしまっては元も子もない。コストが高いなどと言ってられないということで、「鍵を渡すから、送れる時に空輸でアブダビに送って欲しい」とジョージに依頼した。

私がバイルートを最終的に離れる前夜、投宿先のリヴィエラ・ホテル内の日本レストラン「美智子」が閉店した後で、オーナーの美智子ママと娘さん夫妻、それにたまたまバイルートに入っていた大和証券の戸崎の4人が私の送別会を開いてくれた。場所は、ホテル内の美智子ママ個人の部屋。

美智子ママは日本の女子大卒のインテリで日本の著名女性評論家の息子さんと結婚したが、離婚してこのバイルートに来て、日本レストラン「美智子」を開いたのだと聞いた。バイルートを基点として中東各地に飛んで働く駐在員、また中東各地で働いていて休暇などでバイルートにやってくる日本人が、このママと日本食でどれほど勇気づけられたことか。

戦時下の真夜中のバイルート、外は真っ黒な暗闇、その中で断続的に銃声が響いている。酒と簡単なつまみだけの宴であったが、明日をも知れない身の5人の心に沁みるものとなった。

翌日、私は自分のマンションを訪れ、たった一人見送ってくれた何かとお世話になった門番に別れを告げ、バイルートを去り、アブダビに向かった。

5-9. 小高大使からの招待 - 「アブダビは湾岸のニース？」

1971年12月にアラブ首長国連邦(UAE)が独立したことは既述した。同月、日本はUAEを承認した。

在日UAE大使館が開設されたのは1973年12月、在UAE日本大使館が設置されたのは1974年4月のことであった。初代駐UAE日本大使は、小高正直であった。小高大使は、1915年生まれ。1939年外務省からエジプトに留学。外務省きっての高名なアラビストである。エジプトやイラクなどに駐在し、アラブの本を何冊も出版している。とくに、中世の

イスラーム世界を代表する歴史家、思想家、政治家、イスラーム最大の学者として知られるイブン・ハルドゥーンの研究をされた方である。そんなこととは露知らずに、私は一石油会社員としてお付き合いさせていただいていた。

私が小高大使といかにして知り合いになったかについては、まったく記憶がない。着任されたころに私が大使館を訪れてお目にかかり、アラブ産油国の話ををさせていただいたのがきっかけだろうと思う。

それは、私がアブダビ石油に避難していた頃に大使を訪ねた時だった。「日本から島田喜仁石油公団総裁がアブダビに来ておられる。今夜公邸で歓迎の夕食会を開く。貴君に参加願いたい」というお話があった。島田総裁は、通産省の大物次官であった方、そんな方と私などがご一緒してよいのかなと思いつつも、参加させていただくことにした。さらに、2人が日本大使館設置後、大使公邸の最初の客であることを聞き、私は恐縮した。

私が島田総裁や小高大使に産油国や石油事情についてどのような話をしたか、定かな記憶がない。ただ、はっきりと記憶に残っていることがある。私が飛びまわっている産油国について、「ここアブダビは、海岸べりのビル群から見て、さしずめ湾岸のニースですかね。ドバイには運河があり、さしずめ湾岸のベニスでしょうか」、「クウェートには高層ビルがあります。さしずめ湾岸のニューヨークですね」、「バーレーン、ここは島国、開けてもいます。さしずめ、ロンドンでしょうか」と物知り顔に話した。

その時に島田総裁から言われた言葉が忘れられない。湾岸の都市がそんなレベルにはない、比較するのは無理という趣旨の発言をされた後で、「遠藤さん、貴男はニューヨークやニースに行ったことがありますか」と言われた。その時、私はニューヨークやニースやベニスには行ったことがなく、ひどく恐縮した。当時の湾岸の街は、欧米の都市とは到底比べようもない規模であったのだった。

何回かお話をさせていただいた小高大使の奥様は、東京世田谷育ち、「アブダビはつまらないわ。気晴らしするところがない。観るもの、ショッピング、文化的なものがまったくないのね」と言われていた。私のような教養のない田舎者はあまり感じなかったが、都会育ちの方には、当時のアブダビは文化的なものもまったくない場所だったのだろうと思われる。

小高大使は、その後イラク大使に転任された時に、友人を紹介させていただいた。その時に、大使が東京外語大英米科卒で私の先輩であることを知った。イラクから帰国されたからも銀座で食事をご一緒させていただく機会があった。その時に、奥様は水を得た魚のように東京の生活を楽しんでいると伺った。

5-10 アラブ人との保険求償交渉 - 家具物語

アブダビで荷物の到着を待っていた私のところに通関業者から到着通知があったのは、1976年3月下旬のことであった。これで、バイルートの家財すべて運び出したことになるとうれしかった。ところがである、この空輸作戦にまったく予期せぬ事態が発生した。

通知があつてから数日後に、到着した家具がアブダビで新たに賃借した3DKのマンションに運び込まれた。見ると、高さが腰ぐらいまでのサイドボードの上に敷かれている一枚板の大理石が、無残にも2つに割れていた。応接間用の大きなソファの布製の生地に大きなシミができていて、中東事務所用の立派な事務機の足が1本折れていた。それに楽に卓球が楽しめる程の大きさのローズウOODのダイニングテーブルの足もガタピシしていた。

「一体何が起こったんだ」と運送業者に聞いてみると、荷物がアブダビ空港に到着したのが3月18日。荷物が空港に数日放置されている間に雨が降り、荷造り用のダンボールが雨に濡れて家具にシミができてしまったとのこと。アブダビで雨が降るなど、想像もしなかったことが起こったのである。

さらに問い質してみると、荷卸しの人夫たちが家具をポンポンと放り投げていたことが判明した。人夫たちはインド人とかパキスタン人、彼らは高級家具の価値などはまったく分かっていなかったのである。

「これは大理石の一枚板、これはローズウOODのテーブル、大切に取り扱いねば」という感覚がまったくなかった。木製のベンチを片付けるような乱雑さで放り投げられてしまったのであった。予期せぬ雨と人夫たちの無知で、無惨なことが起こったのである。

その通関業者が保険会社の代理店を兼務していたので、これ幸いと保険金求償を行うこととなったが、これがまた一苦勞。当時「保険金はいただくが保険金は支払わない」というのが中東の保険会社の常識だと聞かされていた。

しかし、これは何とかしなければならぬ。私は、「責任者を出せ」と通関業者のオフィスに怒鳴り込んだ。「大体、俺の家具がどういうものか知っているのか。砂漠のテントの中にある箆箆やテーブルなどとは訳が違う。ベイルートでも最高級の家具。こんな立派な家具はアブダビにはない筈だ。ザイド首長でもこんな家具は持っていないと思う。それがどうだ。人夫たちはポンポンと放り投げた。大理石が割れるぐらいのことは分かっている筈だ。とにかく弁償してもらおう。このあたりでは保険事故があつても保険金を支払わないのが常識だそうだが、保険金を支払ってもらうまで毎日でも来るぞ」とまくし立てた。

その甲斐があつてか、保険の査定人も入り、家具の修理費以上の保険金を受け取ることができた。アブダビの保険会社も、やれば出来たのである。

日本人がベイルートを脱出した時には、家具を二束三文で叩き売るかそのままにして脱出した人がほとんどであった。しかし、私の場合には、個人荷物も会社の物もすべて無事に日本とアブダビに持ち出すことができた。ただ一つ持ち出せなかったのは、私がマンションに入居した時に10万円で会社で地下に固定して取り付けた電気のメーターだけ。

当時のベイルート駐在員の中でこんな芸当ができたのは、私しかいなかったらうと思つている。私が何をした訳でもない。現地人を全面的に信用したことに尽きる。ジョージを信用したことがこの結果につながつたのである。

この家具は、その後6年間に亘つて続いたアブダビにある丸善石油の中東駐在事務所と所長宅で使用された。この家具類一式は私が三菱石油ベイルート事務所から100万円で譲り受け

たもの、事務所閉鎖時には280万円で日本食レストラン「慶」に売却したとのこと。ほとんどの日本の会社がバイルートでの家具処分では大損したのに、こちらは全部を運び出せた。しかも、アブダビの雨と作業員の無知による損傷に遭いながらも保険金を受け取り、使い古した上に原価の3倍で売却、よく稼いでくれた家具だった。

主な参考文献：

「レバノン アラブ世界を映す鏡」(小山茂樹、中公新書、1977年)